26）入浴システムについて

国立徳島療養所
勝浦一子　福田シゲル
松尾和子　高塚繁
梶原一二三　高藤信江
豊原静子　青木喜美子
金山武代　只津光子
中西佳江　三上昭子

*PMD*患者における入浴に関する共同研究が、昭和51年4月より開始された。国立療養所に入院中の患者を対象とする入浴看護については、色々な問題が提起されている。研究項目としては次のとおりである。

1. 入浴設備からみた介助
2. 入浴介助の作業
3. 入浴に必要な用具
4. 入浴介助者について
5. 入浴の患者への影響
6. 入浴システム

1. 当施設は「入浴システム」について、全国の実態を知る目的で、アンケートをお願いした。その結果は施設によっても病棟単位によって、入浴介助方法が異なっていた。従って23の病棟を対象とした全体の比率を示すと、① 抱きかかえと機械の導入が12ケ病棟で、② 抱きかかえのみが11ケ病棟であった。なお、機械導入については、リフト3ケ病棟、エレベートバス6ケ病棟、ベルトコンベアー4ケ病棟が使用している。

入浴回数については、週1回が1施設、週2回が11施設、週3回が2施設となっており、殆んどが週2回を原則としている。

入浴設備に対する希望として、① 広さ、② 出入口、③ 脱着室、④ 水平移動の設備、⑤ 省力機械化などの問題があげられる。

なお、今後検討すべき問題点として考えられることは、

① 抱きかかえを望む患者に対しては、合理化に対する協力方法をとること。また、介助者が機械の習熟、安全性をはかること。

② 入浴作業の水平移動方式の検討。

③ 入浴手順の問題として、年令、障害別、男女別 *etc* を考慮した介助方法。

④ 設備と動線による問題（省力化）の検討。

以上のようなことが、アンケートから得られた問題点と考えられた。

2. 私達は入浴介助の合理的なシステム化を考えた上で、次のような実験をおこなっている。抱き

かかえ、ベルトコンベアーシステム、エレベートバスの３つの入浴方法について、介助者のエネルギー消費量を測定した。ダグラスバック法により、*RMR*を算出した。対象患者は体重のほぼ同じ患者18名を選んだ。介助の被検者は６名で、その結果は表に示すとおりである。*RMR*は、それぞれの方法による有意の差を見い出すことが出来なかった。このことから、いずれの作業方法がよいかという結論には至らなかった。しかし、作業習熟の問題があったので、今後、再実験により検討を加える予定である。

RMR

介助被検者 / 介助方法	高○	古○	池○	三○	坂○	市○
抱きかかえ	2.67	3.10	2.34	2.50	3.42	2.25
エレベートバス	3.88	3.59	2.65	3.02	3.92	1.90
ベルトコンベアー	3.11	3.54	3.35	3.02	3.61	2.10

27) ＰＭＤ患児の日常姿勢について 看護面からの検討

国立徳島療養所
石田由己　只津光子
他12病棟看護婦一同

＜はじめに＞

*PMD*患児は、躯幹や四肢の筋力低下に伴って日常生活での姿勢が問題となってくる。この姿勢は脊柱変形と関係があり、身体面での安楽を左右するばかりでなく、精神状態にも影響を及ぼす。この様なことからして、不良姿勢に対しては適正な予防、増悪防止の援助、指導が必要である。すでに当病棟入所患児についての日常の坐位姿勢の観察を行なってきたが、同時にそれらに対する２～３の看護用具の工夫をしたのでその結果を報告する。

A　日常の坐位姿勢に対する観察について

今回の調査では*PMD*患児の坐位時間は24時間のうちの48％を占めていた。即ち起立、臥位時間に比べて最も長かった。

B　姿勢に関する看護用具の試作について

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

PMD 患者における入浴に関する共同研究が、昭和 51 年 4 月より開始された。国立療養所に入院中の患者を対象とする入浴看護については、色々な問題が提起されている。研究項目としては次のとおりである。